復活節第３主日礼拝説教「大きな魚でいっぱい」

日本基督教団石神井教会　2020 年 4 月 26 日

【旧約聖書日課】イザヤ書　61章1～3節

1 主はわたしに油を注ぎ
　主なる神の霊がわたしをとらえた。
　わたしを遣わして
　貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
　打ち砕かれた心を包み
　捕らわれ人には自由を
　つながれている人には解放を告知させるために。
2 主が恵みをお与えになる年
　わたしたちの神が報復される日を告知して
　嘆いている人々を慰め
3 シオンのゆえに嘆いている人々に
　灰に代えて冠をかぶらせ
　嘆きに代えて喜びの香油を
　暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。
　彼らは主が輝きを現すために植えられた
　正義の樫の木と呼ばれる。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　21章1～14節

1その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第
はこうである。2シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身の
ナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。3シモン・ペ
トロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言っ
た。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。4既に夜
が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分
からなかった。5イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、
「ありません」と答えた。6イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれ
ばとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げ
ることができなかった。7イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言っ
た。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込
んだ。8ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキス
ばかりしか離れていなかったのである。9さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあ
った。その上に魚がのせてあり、パンもあった。10イエスが、「今とった魚を何匹か持っ
て来なさい」と言われた。11シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百
五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなか
った。12イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、
「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたか
らである。13イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。
14イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

三度目の経験

今日も、わたしが聖壇に立つ礼拝堂には、ごく限られた奉仕者の皆さんだけがいらっしゃいます。インターネットを用いた「ライブ配信」の礼拝とすることを引き換えに、いつもここに集われていらした皆さんに、日曜日の朝、ご自宅に留まっていただくように強くお願いしてから、これで三度目の主の日になりました。

ちょうど「イースター」の祝いの日からでした。ほとんど空席だけの、ただ真ん中にはご家庭にいらっしゃる皆さんとの唯一の接点として撮影用のカメラが据えられた礼拝堂で、主のご復活を祝うことになるとは、誰も思ってもみなかったことでした。それでも、それが三度目ともなると、もはや、驚きですとか、何か新しいことというような感覚は、薄れてくるものです。「慣れ」と言ってしまえばそういうことなのでしょうが、驚くような新しい経験だったことが、一つの日常の営みになり始めるのです。当たり前のことになり始める。三度目というのは、そのようなことを考え始める機会なのかもしれません。

十字架で死なれ、墓に葬られた主イエスは、三日目の「週の初めの日」、つまり日曜日の朝、女の弟子の前に現れられた後に、ほかの弟子たちの前にそのお姿をお示しになられました。ヨハネ福音書によると、そのような復活の主とお会いする経験は、続く日曜日にも重ねられたことでした。教会は、そのように物語るヨハネ福音書の続きを物語るようにして、日曜日ごとに集まっては、ご復活の主キリストがその真ん中に姿を現してくださることを信じて、祈り、御言葉を聞き、礼拝にあずかってきました。おそらく、ヨハネ福音書が記されたころには、教会にはそのような日曜日ごとの習慣が、確固たるものとなっていたことでしょう。確かに、あの使徒パウロも書簡の中で、「週の初めの日」には集まる習慣になっていることに触れています（Ⅰコリント 16:2）。

ヨハネ福音書の記者は、そのことを示唆するように 20 章で記した後、いったん物語を閉じようとしていました（20:30~31）。そこに、記者は、「このように、週の初めの日ごとに弟子たちの真ん中に主は現れ続けてくださったのである」と記してもよかったかもしれません。そうすれば、主イエスを信じ弟子として従う決心をした者たちが、日曜日ごとの「集まり」を続けることに、より確かな動機を与えたように思われるのです。けれども、今日の福音書日課（ヨハネ 21 章）で、ヨハネ福音書の記者は、そのように物語りません。「週の初めの日」にご復活の主が弟子たちの前に現れてくださった出来事は、三度目、もはや「週の初めの日」とは言われないのです。

「**わたしは漁に行く**」。「**わたしたちも一緒に行こう**」。そう描かれるのは、彼ら弟子たちの日常生活の風景です。シモン・ペトロやゼベダイの子たちは、間違いなく漁師でした。湖に舟を出し、漁に出るのが、彼らの日常なのです。あの、主が十字架につけられた衝撃的な出来事、そしてご復活の主が現れてくださったという驚くべき出来事から、弟子たちはすでに日常の出来事へと戻って来ているのです。けれども、その日常に戻って行った彼らの生活の中で、ご復活の主が姿を現し、出会ってくださった。それが「三度目」の出来事だった、というのです。

「さあ、来て、朝の食事を」

皆さん、これは、本当に驚くべきことを物語っているのです。ヨハネ福音書は、20 章の終わりでいったん物語を終えようとしましたが、そうせずに、続きの物語をここに加えたのです。それは、単なる付け足しではなかったでしょうし、もちろん蛇足でもないのです。

「週の初めの日」ごとにそのお姿を現してくださった主イエスは、今や、「週の初めの日」の「弟子たちの集まる家」ではないところで、そのお姿を現してくださっている。いつ、どこでか。いつでも、どこででも、です。主イエスは、弟子たちが「集まり」に来て、心備えているところに現れてくださるだけでなく、いつ、どこにあっても、否、むしろ日常生活の中でこそ、そのお姿を現してくださる。弟子たちの生活のただ中に、共にいてくださる。

ヨハネ福音書は、このことを、どうしても伝えないではいられなかったのではないでしょうか。それが、驚くべきことだからです。わたしたちが、本当に驚くべきことは、このことだからです。

わたしたちは、主の日ごとに教会に通い、礼拝にあずかってきました。月曜日から土曜日までの日常生活をひととき離れ、礼拝堂に集うことで神の御前に進み出て、ただ心静かにして神の御言葉に耳を傾ける。それは、わたしたちにとって、本当に大切な一週ごとの生活のリズムになっていました。もちろん、今でもそうなのです。日曜日の朝、神の御前に頭を垂れて、御言葉に聞き、ご復活の主のお姿を見る礼拝にあずかる。この礼拝中心の生活を、今、わたしたちは、必死になって守ろうとしています。共に集うことが困難な中で、何とかして、そこに留まろうとしています。このことが失われてしまったら、主イエスに従ってきた自分の人生の歩みが途端に崩れてしまうだろうことを、知っているからです。

ところが、ヨハネ福音書は、そんな信仰生活を死守することに必死なわたしたちに、驚くべきことを示してくれている。「あなたは、日常生活に戻りなさい。そこで、ご復活の主とお会いしなさい」と。

「**何か食べる物があるか**」と、見知らぬ姿で現れた人が問いました。弟子たちは答えます、「**ありません**」と。

皆さんのご家庭で、ご家族の間で、交わされたことがないでしょうか。休みの日、遅くに起きてきた子らが冷蔵庫を開けながら、「何か食べ物ある」と母親に問うのです。母親は、少し冷たい声で答えます。「今頃起きて来ても、何もありません」。見知らぬ姿で現れられた主イエスと弟子たちとの会話は、わたしには、どこかそのような日常の響きをもって聞こえてきます。

「**さあ、来て朝の食事をしなさい**」。いつの間にか、立場が逆転してしまったようです。けれども、主イエスが弟子たちに呼びかけるこの言葉もまた、わたしたちの日常の家庭で聞かされてきた響きをもっているのではないでしょうか。

今日、朝の食卓で、わたしたちは、誰と出会っていたのでしょうか。家族のいる者にも、いない者にも、日常の食卓があります。そこで、あなたは、誰と出会っていたのか。福音書は、そう、わたしたちに問いかけているようです。

「あなたはどなたですか」と問わない

今、わたしたちは、主の日ごとに教会に集まることができず、それぞれの家庭に留め置かれています。感染症を恐れ、社会の動きに振り回され、このような事態になっていることは、間違いありません。けれども、そうであればこそ、ウィルスや何かを「敵」ででもあるかのようにして、「これは戦争だ」と声高に叫ぶべきでもないでしょう。むしろ、わたしたちは、このような情勢の中で、神がわたしたちに問われていることが何であるのかを、真摯に尋ねたいのです。

神は、わたしたちを主イエスと出会わせてくださいました。教会へと導いてくださいました。聖書の御言葉を学ばせてくださり、わたしたちが神の御前に頭を垂れる者とされる道を整えてくださいました。わたしたちが一所懸命に日曜日ごとの礼拝に通ったから、神がそうしてくださった、というのではないのです。まったく逆です。わたしたちがまったく別のことを考えていたとしても、神は、わたしたちを、ともかくこの世界の中で先に選び出してくださり、礼拝にあずかる者としてくださり、キリストに従う者としてくださったのです。

そうであれば、今、わたしたちが、神の御前に共に頭を垂れてきた礼拝堂に集うことが阻まれ、それぞれの家庭に留め置かれているのも、神のご計画があってのことでないはずがありません。神は、今わたしたちが置かれている状況を、ご自身のご計画の中で用いられているはずなのです。

礼拝に集うことができない皆さんは、今、何を感じていらっしゃるのでしょうか。週の礼拝で与えられていたもの、得られていたものが、今は、十分に与えられていない、得られていない、と感じている方もあるかもしれません。けれども、もし、そのような不足感を持たれているとしたら、わたしたちは、いったん立ち止まらなければいけないでしょう。自分は、礼拝で「自分が得たいと思うものを得ようとしていた」だけだったのではないか、と。

弟子たちは、日常生活の場に戻されました。ペトロらは漁に出ました。けれども、彼らはその日、期待していたものを得られませんでした。ただ、復活の主が「**百五十三匹の大きな魚**」を得させてくださいました。それは、彼らが欲していたものとは違うかもしれない、けれども、彼らにとって大きな恵みでした。

それは、どんなの**魚**だったのでしょうか。何とも記されていませんが、ヒントはあります。見知らぬ方を「**主だ**」と呼んだ**弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった**というのです。それは、**主であることを知っていたからである**、というのです。なぜ、わざわざそのように言われるのでしょうか。それは、その人が本当は見知らぬ人だったからではないでしょうか。けれども、その人は、「主」なのです。弟子たちは、その人の中に「主」を見ていたのです。「そのような見知らぬ人が、弟子たちに与えられた、**百五十三匹の大きな魚**として」とヨハネ福音書は物語っているのではないでしょうか。

舟の右側に、今まで見ていなかった反対側に、わたしたちに与えられる**百五十三匹の大きな魚**が、待っているのです。その**大きな魚**、その人たちを迎えるために、わたしたちは今、礼拝堂の席を一時、開けておくことにしましょう。